

## 急成長のリトルインディア 浦河町で活躍中!



稲岡 千春 (いなおか ちはる)

1962年4月、新潟県新発田市生まれ。大学進学を機に上京。2004年浜松町でインド料理店を開業。2017年～2018年バンガロールへ赴任。2021年6月「外国人生活ニーズ調査」事業の駐在員として浦河町に赴任。2022年4月より地域おこし協力隊として活動を始める。外国人生活相談員。外国人労働者労働条件相談員。ヒンディー語通訳。

### 【地域おこし協力隊となったきっかけ】

2021年に外国人生活ニーズ調査のために訪れた浦河町は「海外のリゾートのような美しい町」という印象でした。アップダウンの多い国道を走りながら眼下に海原が広がるたびに小さく歓声を上げたことを思い出します。調査員としての私の任務は外国人に生活ニーズの聞き取り調査を行うことと彼らの生活相談を受けることでした。

言葉は話せるものの、知らない土地で外国人たちとの繋がりを作るのは容易なことではありませんでした。赴任した年の記録を見返してみると生活相談を始めた2021年6月の相談件数は0件、7月は13件でした。どうしたらこの町の外国人と接点を持てるのかと知恵を絞り、外国人の多く集まるショッピングセンターでチラシを配ったりもしましたが結果は芳しくありませんでした。

そんな時に家族で暮らすインド人から4歳になる長男の教育についての相談がありました。親身になって相談に乗ったお礼にとお子さんの誕生会に招待されたのが私のインド人社会デビューのきっかけになりました。誕生会には



5歳児の誕生会

100人近いインド人が参加しており、私はホストから集まった客たちに正式に紹介されました。その後私への相談電話やメッセージは急増し、多い月には300件もの相談が寄せられるようになりました。

10か月間浦河町で働くインド人たちの悩みを聞くうちに、我が子たちと同年代の彼らに親近感が湧き事業終了後も彼らに関わっていきたいと思うようになりました。そして任期が終わりに近づいた頃、地域課題を解決するための「地域おこし協力隊」という制度があり、浦河町でも隊員を募集していることを知りました。

ニーズ調査事業で出会った大勢のインド人たちとの繋がりを大切にしたいという思いと、この美しい町で暮らし続けたいという思いで、私は地域おこし協力隊員として活動することに決めました。



突撃! インドの昼ご飯

## 【女性と子どもへの支援】

私が地域おこし協力隊としての活動のテーマに選んだのは「外国人の母子支援」です。生活相談はこれまでどおり行っていますが、その中でも家族滞在の女性と子どもへの支援の重要性を強く感じ、女性と子どもの支援には特に力を入れています。



“遊びの森”に集うインド人母子たち

## 【菜食主義者の栄養問題】

浦河町に住むインド人の多くはラジャスタン州から来ています。ラジャスタン州はインドの中でも古い習慣が残っている地域で、特に女性たちは教育を受ける機会に恵まれていません。このような文化的背景に加え、女性の殆どが菜食主義者であることが、彼女たちが母親になるときに起きる問題を深刻にします。

栄養知識の不足から妊婦さんたちが貧血になるだけでなく、生まれてきた赤ちゃんの骨が正常に成長しないということもありました。

## 【野菜の共同購入】

インド人たちは概ね食に関してとても保守的で、馴染みのない食べ物を口にすることはめったにありません。インドの菜食主義者は乳製品と豆類の他に豊富な緑黄色野菜から必要な栄養を摂取していますが、町内で彼女たちの常食する野菜を手に入れることは困難です。

着任当初は自分で畑を耕しインド野菜を試作してみましたが、私の力では女性や子どもたちの栄養改善に

はとても間に合わないことを痛感し、いろいろな方々に相談しました。その結果、報道関係者や役場関係者など多くの方々が協力してくださり、沖縄から糸瓜や苦



共同購入の野菜を手にするお父さんたち

瓜、オクラ、土幌町から香菜などの野菜を取り寄せ、インド人家庭に供給することができるようになりました。

## 【地域の経済にも貢献する】

私の活動が新聞などで紹介されるようになると町内の農家さんからも連絡が来るようになりました。また、町内の福祉施設の協力も得られ、青唐辛子、青トマト、甜瓜、メティなどは地元のものが提供できるようになりました。浦河町内でインド野菜を作ってくれる農家が増えれば、インド野菜の共同購入プロジェクトは町内に利益を還元でき、協力隊活動としても理想的な形になるので、良い循環を作れるよう努力していきたいと思います。



カラフルな衣装のインド人女性